

諭吉の殉教、殉死論

目下「福沢諭吉の真実」を書き進めている。福澤といえは「学問のすすめ」である。全一七編からなるこの著作の冒頭で、福澤は「天賦人權説」と「社会契約説」という当時の欧米社会で主流となっていた二つの思想を巧みに説いた。しかし、「学問のすすめ」の核心は第七編だと私はみる。

第七篇が書かれたのは、明治七年三月。ここで福澤は「殉教」「殉死」を人間道德の最高のものとして説いたのである。福澤は西郷隆盛を深く敬愛していた。廃藩置県という大業が西郷なくしては成し遂げられず、これなくして維新は不可能であったことを福澤はよく知っていた。開明なる西郷が、不平士族を糾合して、みずからそれを打ち立てた新政府に武力をもって対抗し自滅するような無謀を企てる人物ではない、正理を諄々と説き、正理に殉じた人物が西郷だというのが福澤の見立てであった。

西郷は西南戦争により政府に武力をもって刃向かった人物ではないか。そう考える人もいるかもしれないが、福澤の見立てはそうではない。西南戦争は

わたなべとしお
渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、理事顧問などを歴任(二〇二〇年十一月、退任)。二〇一七年六月より現職。

鹿兒島私学校に蟬集する士族が、西郷の意に反して起こした暴走である。暴走発生の報を伝え聞いた西郷は「天だ、天でござす」といって、その後は死に場所を求めて九州山中をさまよい歩いただけであった。

福澤は「学問のすすめ」一七編を書き上げた年の翌明治十年九月に「丁丑公論」を執筆した。抵抗の精神の重要性を西郷隆盛の生きざまの中に描き切った名説が丁丑公論である。そこで福澤は次のように述べた。

「近來日本の景況を察するに、文明の虚説に欺かれて抵抗の精神は次第に衰頹するが如し。苟も憂国の士は之を救うの術を求めざるべからず」

幕末・維新の喧騒と動乱の時期を経て、近代主権国家への道をひた走っていたあの時代にあつてなお、福澤は抵抗の精神、殉教、殉死という精神の苛烈を説きつづけたのである。

米国の大統領選、日本の衆院選が終わったが、精神の苛烈さにおいて後者は前者になお劣る。